

前田照雲について

對馬恵美子¹⁾

Report on Syouun Maeda

Emiko TSUSHIMA

Key Words : 前田照雲、青森県、美術団体、五星会、六花会

1 はじめに

現在、前田照雲という芸術家を知っている人は、どれくらいいるだろうか。あるいは、照雲が、大正期に活躍した彫刻家であることを知っていても、その詳しい動向については不明な部分が多いのではないだろうか。つまり、前田照雲については、決して正しい評価がなされていないのが現状であろう。

その原因として、照雲の作品を鑑賞する機会がほとんどないこと、また、照雲の作品の調査もほとんど行われてこなかったこと、さらに照雲についての情報の入手が困難な事などがあげられるであろう。しかし、当館の美術部門で明治・大正期の美術について調査・研究を行ってきた結果、照雲の情報に関しては、比較的多く得ることができた。よって、ここでその情報について報告したいと思う。

2 資料（情報）について

前田照雲に関する資料（情報）は、照雲が生存していた頃の新聞記事、当時発行されていた雑誌、照雲と交流のあった人達が記録した文章などがある。

新聞記事に関しては、東奥日報紙に大正の初め頃から頻りに掲載されるようになる。それらは、照雲が設立した美術団体の「五星会」、「六花会」の動向に関するもの、照雲が著した美術（彫刻）に対する評論、照雲の近況の報告などである。これに関しては、〈表 1〉で、示す。ただし、「六花会」に関しては、自著『青森県史研究第 6 号』の「大正期の青森県出身の在京美術家団体—六花会、北冥会、白曜会について—」（平成 14 年 2 月発行）で詳しく述べているので、**まとめ**の所で、六花会について述べるに止め、〈表 1〉では六花会に関する部分は省略した。

雑誌については、中央で発行された『研精画誌』、『中央美術』、『美術之日本』、青森県関係者が発行した『陸奥の友』などがある。ここでは、『研精画誌』、『中央美術』、『美術之日本』について、〈資料 2〉で示す。

また〈資料 1〉、〈資料 2〉から明らかになった、重要な美術団体については、以下のまとめに記す。

3 まとめ

前田照雲（勝也）（明治 12 年～大正 13 年）の父・前田常吉は京都の仏師の流れを汲む腕のいい職人で、照雲や兄の早坂（前田）寿雲（鉄之助）（明治 5～昭和 4）とともに、秋田から本県に移住してきた。寿雲、照雲兄弟は、父から彫刻を教わり、寿雲は明治 26 年に独立する。照雲は明治 30 年頃に上京、日本近代木彫の祖と言われる高村光雲の門に約 2 年間入る。その後、馬体彫刻で認められ、明治天皇や宮家で買い上げられ、日本美術協会展へ入選が続き、大正 3 年には文展に入選する。この頃から青森県内では、東京で目覚ましい活躍をしている彫刻家・照雲の名が知られるようになり、その動向が注目、あるいは期待されるようになっていく。

寿雲と照雲の兄弟は弘前と東京に門をはったことになり、中野桂樹や三国慶一らのように、県内で彫刻を志す者は、まず寿雲の門で学び、さらに東京の照雲の門へ入り、中央へ進出するという道をたどっている。また、明治から昭和前期（戦前）にかけての本県の彫刻家のほとんどは、常吉、寿雲、照雲のいずれかの門で学んでいる。

1・プレ五星会、五星会について

照雲は、大正 6 年 1 月 20 日～27 日まで東京の三越新館（東京都日本橋、大正 3 年に新館が完成）において五星会展覧会を開催した。発起人は谷口掬月、青柳明美、秋田雨雀、佐藤紅緑、江部鴨村で、出品者は照雲の門弟で、生活を共にし創作活動に従事していた青年彫刻家達の三国花影（慶一）、鹿内芳洲、石戸谷津南、宮野花香に照雲を加えた 5 人である。実は、照雲は、前年の大正 5 年 7 月に、大阪の三越及び、照雲の自宅近くの場所

1) 青森県立郷土館 学芸主幹（〒 030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

で木彫展覧会を開催しており、五星会メンバーの他に、工藤翠雲、中野洋雲を加えた 7 名に大阪出身の彫刻家・今戸精治を加えた 8 名が出品し、その中には照雲が東京勸業博覧会で二等賞を得た「冬野」、大正天皇の御料馬を彫刻した「藤園号」の 2 点の馬体彫刻も含まれ、当時の美術雑誌「美術之日本」に好評価を持って紹介されている。また、この展覧会が、大阪及び、東京で県出身の芸術家が主催した、初めての展覧会と思われる。

五星会は当初春秋の 2 回の展覧会を開催の予定であったが実際に 2 回目が開催されたのは、約一年半後の大正 7 年 7 月であった。五星会の第 2 回目の展覧会の開催がこのように延期されたのは、照雲が中心となって立ち上げた六花会という美術団体の設立とその運営の方へ重きを置かざるを得なかった為であろう。

2・六花会について

六花会は、東京に在住する青森県出身の日本画、洋画、彫刻、文学、演劇などの芸術家たちを総て対象とする規模の大きい団体であった。「六花会」という名は「むつのはなかい」と言われ、大正 6 年 4 月 12 日付けの東奥日報紙に「六花会とは陸奥の花会ということを示したもので、津軽人会の意です。美術を中心としたあらゆる芸術家の集まりです。」という記載がある。これに加えて、日本では古くから雪を六弁の花にたとえて「六つの花」とよんでいることから、本県を象徴する雪の意も込められていたと思われる。実は、照雲が東京で頭角を現し始めた頃から、照雲に対して、青森県から出て東京で孤軍奮闘している芸術家達の拠り所となるような県人会のような集まりを立ち上げることを、期待する声も大きかった。しかし、照雲が六花会結成の実行になかなか踏み切れなかった一番の理由は、すでに五星会のメンバー達を含む郷里出身の青年彫刻家たちを支援していたこともあり、六花会の活動を維持する為の金銭的な問題が大きかったと思われる。しかし、昭和 6 年になって、照雲の後援者である富豪布嘉の三代当主・佐々木嘉太郎（五所川原市 明治十二～昭和三十六年）と津軽家代十三代当主・津軽英麿（東京 明治 5 年～大正 8 年）のふたりの援助を得られることになり、照雲はようやく六花会の成立を決意することができたと考えられる。佐々木嘉太郎は初代が築いた布嘉の基礎を（二代目早世）を継ぎ、金融界、事業界を中心に近代的な経営を行い、その地位を堅実にした。一方で、地方救済のための援助を押しまらず、円満で温厚な性格は、多くの人から信頼された。

英麿は十二代当主津軽承昭の養子で、近衛忠房の次男である。明治 19 年から明治 37 年までドイツ留学、その後、早大、慶大、学習院の講師を務める。明治 39 年に小笠原照子と結婚。明治 40 年に法制調査事務を委託され、朝鮮に赴任。大正 5 年に津軽家を継ぎ、伯爵となる。妻・照子とともに、六花会の発展に協力した。

照雲は六花会は、単なる会員の親睦の場ではなく、これから芸術を志す無名の若い芸術家の支えになる場にしようとする考えが大きかった。こうして、大正 6 年 3 月 11 日に、照雲の家で六花会の第 1 回が行われた。この時に集まったのは、照雲の他に、彫刻の翠雲、洋雲、津南、芳洲、慶一、洋画の今純三、木谷末太郎、小林喜代吉、日本画の西館栄子、文学の秋田雨雀、江部鴨村、の十二名であった。以後、六花会の集まりは例会と呼ばれ、月に一度の予定で開催されるが、例会はおおよそ酒宴を伴い、会員どうしの親睦をはかることが最も主なる目的であったようだ。第 3 回目の例会は津軽邸で開催されており、英麿の協力の深さが解る。以後、親睦中心の例会が開かれていくが、大正 7 年の 5 月 12 日の例会が照雲の家で行われた時に、例会の内容を協議し、会員へ例会の案内状を出すなどの事務を行う委員を選定することとし、谷口知夫、松井百花、中村旭洋が選出された。さらに各分野の代表者が講演を行う事を決定した。その代表は、文学は雨雀、洋画は純三、日本画は鳥谷幡山、彫刻は照雲であった。また、大正 7 年 9 月の例会では会員達が帰青し、青森市で一般市民に対して懇話会を開催し、六花会という会の存在を提示した。第 2 回の例会は 23 名、第 3 回例会は 27 名の参加があり、大正 11 年 1 月までの間に、確認できただけで 23 回の例会と 2 回の展覧会を開き、他に会員の画会の発会など約 20～30 名の会員が参加する活発な活動を行った。

また、大正 6 年 7 月と大正 7 年 4 月には、六花会会員による展覧会を開催した。六花会の第一回の展覧会は東京上野の精養軒において、大正 6 年 7 月 8 日に開催、日本画に幡山、中村旭洋、三上千年、石橋一貫、越前翠村、葛谷龍岬、栄子、洋画に純三、藤野草明、末太郎、谷口知夫、森非折、笹森精一郎、彫刻に照雲、芳洲、慶一、津南、花香、中野桂樹、翠雲、松田菊四郎、工藤繁造、日本画と工芸の両方に一貫と、各分野の美術家たちが出品した。しかし、会場に足を運んだ者は、案内状が送付された青森県人関係者にとどまったものと思われる。六花会の第 2 回の展覧会は、英麿の屋敷で行われ、会員 30 名の作品 55 点が出品された。これは、最初の状況を残念に思った英麿が、自ら会場の提供を申し出て実現できた展覧会であり、英麿の六花会に対する思い入れの深さをあらわすものであった。また大正 7 年には、六花会の機関誌「陸奥の友」も発行された。

このような六花会の活発な活動を支えたのは、照雲の尽力と英麿や嘉太郎の支えがあったればこそであったが、照雲自身は六花会の活動をはじめた大正 6 年の秋に、文展への出品予定であった彫刻が暴風雨の為に破壊され、やむなく出品を断念して以来、自己の創作活動に悩むようになり、良い結果を出せなくなっていた。そしてつい

に照雲は、大正 8 年 4 月に山村に隠遁することを発表した。さらにその五日後に六花会の最大の理解者であった英麿が突然死去し、一挙に六花会の勢いが衰え、翌年の一月の例会では六花会の解散を宣言し、旧六花会の会員で北冥会という新しい会をスタートさせ仕切り直しをはかった。しかし、求心力を失った北冥会は春秋二回の例会を大正 11 年まで開くにとどまり、参加者も僅かであった。

そのような中で、六花会、北冥会のうちの主な青年作家たちは大正 9 年 10 月に白曜会を設立した。翌、大正 10 年 4 月に陸奥の友には「宣示 白曜会」が掲載される。同人は洋画の純三、彫刻の慶一、石戸谷剛、早坂三吉郎、桂樹、工藤翠浦、日本画の竹森節堂であり、メンバー 7 名のうち 5 名が彫刻家、3 名が帝展入選者を含む集まりであった。白曜会に集まった人は何れも若く、六花会の二回の展覧会は東京で開いているのとは異なり、その目的を郷里で展覧会を開き、中央の進んだ芸術を郷土に示すことを目的としたことであった。白曜会の第 2 回展は、同人の 7 名による出品であったが大正 11 年 6 月の第 2 回展からは 7 人の白曜会同人の他に、師匠格の照雲や幡山、日本画では翠村、旭洋、洋画では工藤みさを、喜代吉、伊藤忠造、下山木鉢郎、彫刻では芳洲、飛雪が出品し、4 回の展覧会をそれぞれ青森市と弘前市の二箇所で開催した。大正 13 年 7 月 20 日、六花会を設立した照雲の追悼会が、奇しくも白曜会の最後の活動となった。白曜会の活動は、東奥日報紙上で好評をもって紹介され、白曜会の展覧会も、弘前や青森の人々が中央の進んだ美術の傾向を知ることができる良い機会となった。第 3 回展の新聞の関連記事によれば、赤十字社の会場には連日 3 ～ 400 人の入館者が訪れ、5 日間の入場者は約二千人で、大変好評の様子が伝えられている。照雲の志は、照雲が六花会から離れた後も北冥会、白曜会へと東京在住の美術家達によって受け継がれ、さらには、昭和初期に葛谷龍岬らが設立した東奥美術社展へと続いて行くことになる。

<表 1> 前田照雲に関する新聞記事（東奥日報紙）

西 暦	和 暦	月	日	見 出 し	関係団体	概 略
1911	大正 2	11	27	東北地方は美術思想の最も・・・		照雲の人物紹介
1911	大正 2	11	28	前号に弘前市出身の前田照雲氏の・・・		照雲から来た手紙の紹介記事
1911	大正 2	12	21	今日この頃 雪の人 *芳香会の組織	芳香(流)会	芳香会について 要約：大仏殿が修繕中で古材を払い下げているのを譲り受けて、観音像を彫り頒布することにした。
				大仏殿古材をもて観音像		
1914	大正 3	2	6	東京目黒の前田照雲氏は・・・	芳香(流)会	芳香会について
1914	大正 3	11	20	東京府下目黒にある前田照雲氏から・・・		文展へ入選した木彫「目黒の春」が宮内省より買い上げられたこと
1915	大正 4	1	1	甲寅の美術界を顧みて		照雲の論文
1915	大正 4	1	14	兎と美術		照雲の論文
1915	大正 4	2	18	此の間、東京府下・・・	芳流会(第2回)	
1915	大正 4	3	16	馬体木彫を頒布する・・・	芳流会(第2回)	
1915	大正 4	3	30	前田照雲君を・・・		
1915	大正 4	6	4	美術同好会の彫刻品陳列	島川観水の美術同好会	工藤翠雲、中野洋雲、前田照雲らの作品の頒布
1915	大正 4	6	6	前田照雲氏は・・・	芳香会(第2回)	
1915	大正 4	6	10	彫刻品展覧会 *木造町公会堂 主催：島川観水	美術同好会(第2回)	工藤翠雲、中野洋雲、前田照雲らの作品の頒布
1915	大正 4	6	11	本日五所川原の公会堂にて・・・	美術同好会(第2回)	工藤翠雲、中野洋雲、前田照雲らの作品の頒布
1915	大正 4	6	13	彫刻品同好会	美術同好会(第2回)	工藤翠雲、中野洋雲、前田照雲らの作品の頒布
1915	大正 4	7	9	島川観水の美術同好会は・・・	島川観水の美術同好会	
1915	大正 4	9	14	県人と美術(1)		照雲著
1915	大正 4	9	15	県人と美術(2)		照雲著
1915	大正 4	9	16	県人と美術(3)		照雲著
1915	大正 4	9	17	県人と美術(4)		照雲著
1915	大正 4	9	18	県人と美術(5)		照雲著
1915	大正 4	9	19	県人と美術(6)		照雲著
1915	大正 4	10	28	神武天皇御木像頒布	芳流会(第3回)	
1915	大正 4	12	3	芳流会作品頒布順	芳流会	
1915	大正 4	12	22	東京府下恵比寿駅向かい、・・・		照雲の近況報告
				10月20日陸軍騎兵実施学校で閑院宮殿下の台覧に供し、「壯雪快拳」。大日本美術協会に於ける東京彫工会第28回競技展覧会で銅牌を受領。		東京彫工会第28回競技展覧会で銅牌
1916	大正 5	1	1	美術に現れた龍		照雲著
1916	大正 5	2	25	壽雲木彫展覧会	雲刀香	兄の頒布会に、照雲も出品
1916	大正 5	2	29	壽雲刀香会発会式	雲刀香	兄の頒布会に、照雲も出品
1916	大正 5	3	20	翠雲木彫置物頒布		壽雲の弟子の翠雲の頒布会
1916	大正 5	8	8	在東京の前田照雲氏より・・・		照雲の近況

西 曆	和 曆	月	日	見 出 し	関係団体	概 略
1916	大正5	8	25	本県彫刻家活躍 △前田照雲氏木彫展覧会		木彫展覧会(大阪、渋谷にて)
1916	大正5	10	12	芸術と生命(1)		照雲著
1916	大正5	10	13	芸術と生命(2)		照雲著
1916	大正5	10	14	芸術と生命(3)		照雲著
1916	大正5	12	15	大正5年最終の叫び(上)		照雲著
1916	大正5	12	16	大正5年最終の叫び(下)		照雲著
1916	大正5	12	17	大正5年最終の叫び(下)		照雲著
1918	大正6	1	18	雑音の中にて 五星会木彫展覧会 *6月20日から6月27日まで五星会木彫展覧会 於三越新館5	五星会	
1918	大正6	1	24	紫雲 新しい木彫り	五星会	
1918	大正6	1	25	五星会から帰って	五星会	
1918	大正6	1	26	五星会の趣旨と作品	五星会	
1918	大正6	1	27	県出身の美術家(1)		照雲著
1918	大正6	1	28	県出身の美術家(2)		照雲著
1918	大正6	1	29	県出身の美術家(3)		照雲著
1918	大正6	1	30	県出身の美術家(4)		照雲著
1918	大正6	1	31	県出身の美術家(5)		照雲著
1918	大正6	2	1	県出身の美術家(6)		照雲著
1918	大正6	2	2	県出身の美術家(7)		照雲著
1918	大正6	2	3	県出身の美術家(8)		照雲著
1918	大正6	2	4	県出身の美術家(9)		照雲著
1918	大正6	2	5	県出身の美術家(10)		照雲著
1918	大正6	2	6	県出身の美術家(11)		照雲著
1918	大正6	3	19	立見將軍木彫肖像頒布会		
1918	大正6	4	25	春宵雑話(5)	五星会	
1918	大正6	4	25	木彫家前田照雲氏の引率する・・・・・・	五星会	
1918	大正6	5	22	照雲氏の木彫り頒布 ▲馬体置物「春の輝」	芳流会(第4回)	
1918	大正6	6	25	前田照雲氏は・・・	芳流会(第4回)	
1918	大正6	7	19	実るまでの努力 六花会の事々(1)		
1918	大正6	7	20	実るまでの努力 六花会の事々(2)		
1918	大正6	7	21	実るまでの努力 六花会の事々(3)		
1918	大正6	7	22	実るまでの努力 六花会の事々(4)		
1918	大正6	7	23	実るまでの努力 六花会の事々(5)		
1918	大正6	7	24	実るまでの努力 六花会の事々(6)		
1918	大正6	7	25	実るまでの努力 六花会の事々(7)		
1918	大正6	10	5	苦心中の大作破壊 前田照雲氏の遺憾		照雲の近況
1918	大正6	10	27	暴風の後(1)		照雲著
1918	大正6	10	28	暴風の後(2)		照雲著
1918	大正6	10	29	暴風の後(3)		照雲著
1918	大正6	10	30	暴風の後(4)		照雲著
1918	大正6	10	30	暴風の後(5)		照雲著
1918	大正7	6	22	前田照雲氏の五星会第二回木彫・・・・・・	五星会(第2回)	
1918	大正7	7	10	三越の展覧会について	五星会(第2回)	
1918	大正7	7	13	五星会の木彫展覧会の・・・・・・	五星会(第2回)	
1918	大正7	7	21	五星会の木彫(上)	五星会	和田山蘭著
1918	大正7	7	22	向日葵の蔭にて五星会の木彫(下)	五星会	和田山蘭著
1918	大正7	1	1	春の輝き		
1918	大正7	2	7	血涙の跡 1		照雲著
1918	大正7	2	8	血涙の跡 2		照雲著
1918	大正7	2	9	血涙の跡 3		照雲著
1918	大正7	2	10	血涙の跡 4		照雲著
1918	大正7	2	11	血涙の跡 5		照雲著
1918	大正7	2	14	血涙の跡 6		照雲著
1918	大正7	2	23	前田照雲氏の置物青銅馬体頒布		照雲の彫刻頒布会
1918	大正7	2	27	草鳴を想いて 照雲		照雲著 草鳴について
1918	大正7	5	9	下渋谷より 帰省せる洋画家木谷末太郎君へ(上)		照雲著
1918	大正7	5	10	下渋谷より 帰省せる洋画家木谷末太郎君へ(中)		照雲著
1918	大正7	5	11	下渋谷より 帰省せる洋画家木谷末太郎君へ(下)		照雲著
1918	大正7	6	9	初夏の都より(上)		照雲著
1918	大正7	6	10	初夏の都より(中)		照雲著
1918	大正7	6	11	初夏の都より(下)		照雲著
1918	大正7	6	26	木彫展覧会 三つの魂会 故郷の皆さんへ(上)	五星会	
1918	大正7	6	27	故郷の皆さんへ(中)		照雲著
1918	大正7	6	28	故郷の皆さんへ(下)		照雲著
1918	大正7	7	3	選書受賞	五星会	
1918	大正7	7	12	木彫芸術の変遷について(上)		照雲著
1918	大正7	7	13	木彫芸術の変遷について(下)		照雲著
1918	大正7	7	13	弘前公園における津軽伯爵及び夫人	五星会	
1918	大正7	10	4	照雲刻の馬		美術展の開催

西 曆	和 曆	月	日	見 出 し	関係団体	概 略
1918	大正7	11	6	駱駝の歩み 渋谷七重様へ(下)		照雲著
1918	大正7	11	7	駱駝の歩み 中市絶壁様へ(上)		照雲著
1918	大正7	11	8	駱駝の歩み 中市絶壁様へ(下)		照雲著
1919	大正8	4	1	東奥文壇 山の村へ(上) 前田照雲		照雲著
1919	大正8	4	2	山の村へ(下)		照雲著
1919	大正8	5	20	無始無終語(上)		照雲著
1919	大正8	5	21	無始無終語(下)		照雲著
1919	大正8	8	23	照雲氏と後進 隠棲に当たりて	五星会	
1919	大正8	9	16	入院の前日に(上)		
1919	大正8	9	17	入院の前日に(下)		
1919	大正8	11	26	大鱈より 著: 柯芳	六花会	
1919	大正8	12	7	温泉の村から都の人々へ(1)		照雲著
1919	大正8	12	8	温泉の村から都の人々へ(2)		照雲著
1919	大正8	12	9	温泉の村から都の人々へ(3)		照雲著
1920	大正9	1	28	大鱈より		
1920	大正9	2	21	大鱈短歌会		
1920	大正9	2	23	若い歌人の集い		
1920	大正9	2	24	忘れられない草明(上) 越前翠村へ		照雲著
1920	大正9	2	25	忘れられない草明(下) 越前翠村へ		照雲著
1920	大正9	3	20	照雲作品頒布会 晩春と題したる老猿の置物		
1920	大正9	3	21	照雲作品申込所		
1920	大正9	4	6	春の宵に 淡谷悠蔵様へ(1)		照雲著
1920	大正9	4	7	春の宵に 淡谷悠蔵様へ(2)		照雲著
1920	大正9	4	8	春の宵に 淡谷悠蔵様へ(3)		照雲著
1920	大正9	4	10	大鱈湯治中の・・・		照雲の近況報告
1920	大正9	4	11	照雲作品頒布会だより		
1920	大正9	4	23	大鱈湯治中の・・・		照雲の近況報告
1920	大正9	4	24	帰京に際して皆様へ(上)		照雲著
1920	大正9	4	25	帰京に際して皆様へ(中)		照雲著
1920	大正9	4	26	帰京に際して皆様へ(下)		照雲著
1920	大正9	5	2	大鱈静養中の・・・		照雲の近況報告
1920	大正9	5	25	神秘の世界への一步(1)		照雲著
1920	大正9	5	26	神秘の世界への一步(2)		照雲著
1920	大正9	5	27	神秘の世界への一步(3)		照雲著
1920	大正9	6	22	寂しき心で(1)		照雲著
1920	大正9	6	25	寂しき心で(2)		照雲著
1920	大正9	6	27	寂しき心で(3)		照雲著
1920	大正9	6	28	寂しき心で(4)		照雲著
1920	大正9	7	18	黙語 加藤東籬兄へ(上)		照雲著
1920	大正9	7	19	黙語 加藤東籬兄へ(下)		照雲著
1920	大正9	7	21	前田照雲氏へ(上)		山蘭から照雲へメッセージ
1920	大正9	7	22	前田照雲氏へ(下)		山蘭から照雲へメッセージ
1920	大正9	9	14	思想と生と 記念号に際して 横斜老兄(1)		照雲著
1920	大正9	9	18	思想と生と 記念号に際して 横斜老兄(2)		照雲著
1920	大正9	9	23	思想と生と 記念号に際して 横斜老兄(4)		照雲著
1920	大正9	9	24	思想と生と 記念号に際して 横斜老兄(5)		照雲著
1920	大正9	9	25	思想と生と 記念号に際して 横斜老兄(6)		照雲著
1920	大正9	12	13	秋田雨雀、前田照雲の両氏は發起して、県出身の青年彫刻家工藤翠浦氏の・・・木彫会を起こした・・・		工藤翠浦の画会の發起人のひとり
1922	大正10	1	30	奨学会と貸費(上)		照雲著
1922	大正10	1	31	奨学会と貸費(中)		照雲著
1922	大正10	2	1	奨学会と貸費(下)		照雲著
1922	大正10	2	1	奨学会と貸費(下の1)		照雲著
1922	大正10	2	2	奨学会と貸費(下の2)		照雲著
1922	大正10	2	15	草鳴と末太郎(上)		照雲著
1922	大正10	2	16	草鳴と末太郎(下)		照雲著
1922	大正10	3	19	横斜老兄へ		照雲著
1922	大正10	6	1	東奥文壇 若草の香 桜庭芳露氏へ		照雲著
1922	大正10	6	17	前田照雲氏の銅製馬体頒布 戦没軍馬記念	芳流会	
1922	大正10	6	23	神秘の花 中市謙三へ(6月10日病床にて)		照雲著
1922	大正10	7	26	芳洲木彫会 弘前出身青年彫刻家	芳洲木彫会	発起人
1922	大正10	10	23	照雲氏馬体置物	芳流会(第5回)	
1922	大正10	11	9	作品頒布会(上)	作品頒布会	発起人
1922	大正10	11	9	雲 林征次郎へ		照雲著
1922	大正10	12	9	黎明の人々へ		照雲著
1922	大正11	2	1	前田照雲		写真のみ
1922	大正11	3	2	伊豆伊東から不幸の生みし幸(上) 前田照雲		照雲著
1922	大正11	3	3	伊豆伊東から不幸の生みし幸(下) 前田照雲		照雲著
1922	大正11	4	5	伊東温泉より(下) 前田照雲		照雲著

西 曆	和 曆	月	日	見 出 し	関係団体	概 略
1922	大正 1 1	12	16	人生と死と思想と(1) 四国にて前田照雲		照雲著
1922	大正 1 1	12	17	人生と死と思想と(2) 四国にて前田照雲		照雲著
1922	大正 1 1	12	19	人生と死と思想と(3) 四国にて前田照雲		照雲著
1923	大正 1 2	6	11	前田照雲氏消息		徳島県で制作中
1924	大正 1 3	6	7	前田照雲氏 東京にて死亡		
1924	大正 1 3	6	12	照雲氏の死 今純三		今純三の追悼文
1924	大正 1 3	7	4	照雲氏追悼会 12日赤十字で		
1924	大正 1 3	7	10	白曜会展覧会 11日から三日間	白曜会	
1924	大正 1 3	7	13	白曜会同人の洋画と彫刻 赤十字支部開催の	白曜会	
1924	大正 1 3	7	17	白曜展開催 弘前陳列館で	白曜会	

<表 2> 前田照雲に関する雑誌

雑誌名	巻	号数	発行	年	月	目次 見出し	
研精画誌		129	大正	7	9	学芸	「迷いから起こる芸術」 著：前田照雲
中央美術	4	3	大正	7	3		「混沌たる木彫界」 著：前田照雲
美術之日本	5	9	大正	2	9	論議と感想	美術界之近件 前田照雲氏の仁王感
美術之日本	8	8	大正	5	8	評論及研究	「現代美術と虚偽」 著：前田照雲
美術之日本	8	8	大正	5	8	雑録	前田氏木彫展覧会
美術之日本	8	10	大正	5	10	評論及研究	「絵画彫刻と馬体の研究」 著：前田照雲
美術之日本	8	12	大正	5	12	評論及研究	「日本画に於ける馬の歩様」 著：前田照雲
美術之日本	9	1	大正	6	1	評論及研究	「著名の日本画に現はれた馬」 著：前田照雲
美術之日本	9	2	大正	6	2	評論及研究	「日本画の彫刻と馬体」 著：前田照雲
美術之日本	10	2	大正	7	2	評論及研究	「近時の木彫芸術」 著：前田照雲
美術之日本	10	4	大正	7	4	評論及研究	「気分の模倣と形式の模倣」 著：前田照雲
美術之日本	10	7	大正	7	7	雑録	郷土社の芸術に就いて
美術之日本	12	10	大正	9	10	評論及研究	批評殊に作家の批評
美術之日本	13	1	大正	10	1	評論及研究	「真の芸術の第一歩」 著：前田照雲
美術之日本	13	6	大正	10	6	雑録	木彫芸術と女性